

放課後身体検査～クラス委員長編～ 【特典台本】

※一部本編内容と異なる箇所がございます。予めご了承ください

「ん、」めん。もうちょっと奥のほうに行ける？」

「ありがとう。さつきからグイグイ背中を押されちゃって……」「

「満員電車はいつものことだけど、今日は特に多いよね」

「このまま後10分……いつも思つけど長いわ」

「まあ、いつもあなたが一緒に登校してくれるから、退屈はしないんだけど」

「あっ、大丈夫？ そっちも結構押されてるみたいだけど」

「そうだよね。そっちからもグイグイ来るし……ああ、早く駅についてほしい……」

「うん？ 私？ ……私も大丈夫。なんとか踏ん張れるから」

「でも、本当に毎日これだと疲れるよね。電車の時間変えようかな」

優衣

「そう、一本早く。そしたらもうちょっとマシでしょ」

「……ただ、一本早くすると、20分は家を早く出ないといけないし……」「

「教室に着いてからも暇だもんね。こんな感じで誰かと喋つたりして時間を潰せるといいんだけど……」

「あなたは？ 私が電車変えるつて言つたら一緒に変える？」

「え？ いいの？ 20分つて結構大変よ」

「そう？ 付き合つてくれるなら……本当に変えようかな」

「あ、でも20分早く起きるのはきついし

……」

優衣

「んっ？ クラス委員長だし朝強そうだつて？ ないない！ どっちかって言うと朝は弱いほうだし」

優衣

「これでも結構頑張つて起きてるんだから。目覚まし時計三つ使つたりとか」

優衣

「クラス委員長が遅刻するのも印象悪いしね。
せっかく推薦してもらつたんだから、ちゃんと
頑張りたいし」

優衣

「えつ？ 頑張つてる？ 誰が？ ……私？
全然だよ。必要最低限のことしかやってない
し」

優衣

「この前、本を没収してた？ だつて、あれは
学校に持つてくる必要のないものだったし」「
怖くないかって？ それはあんまり……うち
のクラスの男子、みんな優しいし」

優衣

「でも、アレだよね。そういうの……好きな子
が多いよね」

優衣

「ほら、男子特有つていうか……そういう本。
時々持つて来ている人がいるでしょ」

優衣

「没収するの怖くはないんだけど、そういう本
だってわかるとすぐ恥かしいんだよ、あれ」

優衣

「そうだよ。恥ずかしいの我慢してやつてるん
だから」

「まあ、男の子ってそういうのに興味あるみた
いだし、仕方ないかなって——」

「きやつ！？」

「ん、つう…………だ、大丈夫？」「めんね。
思いつきり押しちゃつて」

「……つて、なんか、後ろからすく押されて
……」「めんね。すぐ離れる……」

「あ…………」

「えつ？　いや、何かあったっていうか……そ
の、あなたの手が……私の、胸に……」

「つて……今気付いたの？」

「ち、ちょっと待つて……窮屈だらうし、すぐ
離れるから……」

「んんっ、ぐ……あ、だめ……全然動けな
い。そっちは？」

「ああ、そっちも押されてるんだ」

「んと……」「れつて、あなたの手が……あなた
と私は間に挟まつて……も、もしかして、
抜けなくなってる？」

優衣

「うぐひ……い、いい。動かさないで。動かされると……へ、変な感じ、だから……」

優衣

「うん、もう……そのままでいいから……」

優衣

「し、仕方ないよね……満員電車だし……」

優衣

「うん……早く……駅に着くといいね」

トラック2●放課後身体検査

優衣

「『』れで良』、と……田誌終わり」

優衣

「あなたも田直の仕事終わつた？ お疲れ様」

優衣

「なんか……今日は朝から疲れたよね。すゞい満員電車だつたし、ちょうど田直がやることも多かつたし」

優衣 優衣
「あとば、机の引き出しに忘れ物がないか確認して帰ろつか」

「私、『』のほうから見るから、あなたはそっち側から見てもいいんで？」

「えつと……これは良し……『』ちも良し……」「ちは……あ、教科書置きつ放し」

優衣

「これはOKで……こっちも問題なし……こっちの

ちのは……何これ？ 手帳かな？」

「忘れ物になるのかな？ ……先生に渡しておけばいいか……」

「こつちはOK……こつちは……ある」

「あっ、これあなたの机だよね。本が入ってるよ。忘れないようにな」

「本？ ……じゃないよ。引き出しに本が入ってるよ。ここのあなたの机でしょ」

「教科書じゃないみたいだけどへつ！？」

「あ、えつ？ ど、どうしたって……いや、びっくりしたんだけど……」

「これ……あなたの？ 机の中に入つてたけど」

「ん？ なんで驚いてるのよ。自分でしょ……」

「……そのエッチな本」

優衣

「まあまあまあ、そんなに慌てたふりしなくて
もいいから。時々友達とこっそり見てるの
知ってるし」

「だって、廊下の隅のほうでコソコソしてたり
するでしょ。あれ結構目立つよ」

「たぶんそういう本読んでるんだろうなって
思ってたし」

「さっきも言ったけど、興味があるのは当然だ
と思うから。ただ、学校に持つて来たらダメ
だけど」

「まあ……あなたには色々助けてもらってる
し、今日は見なかつたことにしてあげる」

「うん？ まあ、そんな友達に押し付けられた
とか言われても、本当かどうかわからない
し」

「ほらほら、早く鞄にしまつたら？ それとも
一緒に読む？？」

「読んでもいい……？ ……あ、いや、まあ…
…読んだことないし……き、興味がないわけ
じゃないけど……」

優衣

「そりや女の子だつて多少はそういうのあるから……どういうもののかなつて思つたりはするけど……」

優衣

「……ほ、本当にいいの？ 誰にも言わない？ 絶対秘密にしてくれる？」

優衣 「し、信用するからね。…………うん、じゃあ、ちょっとだけ……」

優衣 「うつわ……おっぱい……」

優衣 「えつ？ だつて、ほら、おっぱい出でるし

優衣 「うん、本当に初めて。こういうの見るの

「なんか……すごいね。こんなに堂々と見せてるんだ」

優衣 「す」「い……綺麗な形……みんなこんなに大きいものなの？」

優衣 「は、はいっ！？ 私も大きい！？」

優衣 「な、なんであなたにそんな事言える…………あ、そ、そつか……」

優衣 「あ、あははっ、そうでした。今朝、触られたんだった」

「……忘れてたってわけじゃないけど、い、意識しないようにしてたから」

「意識すると、は、恥かしいし」

「こ、こんなのじゃないって！　こんな本に載つてゐみたいに大きくなつから！」

「え、ええ……大きいの？　つていうか、そういう目で見てたの？」

「あ、別に怒つてるわけじゃないんだけど……なんか、そつ言われると、恥かしくなつてくれる」

「自分でも……よくわからないんだよね。あんまり友達のも見ないようにしてるし」

「その……せ、せつかだから訊いちゃうけど……ど、どうだつたの？」

「だから、ほら……私の、胸……お、大きさ、とか、こう……形とか……」

「えつ？　わからないの？　服の上からだつたから……？」

優衣

「ああ……そういうものなんだ。なんか……車に乗ってる間、ずっと触られてたから、色々わかつちゃったのかと思つて」

優衣

「そつか……わからなかつたんだ……」

「気になるのかつて？ そりや、ね……あんまり人と比べる機会もないし……」

「身体検査？ そういうときもあんまり人のほう見ないから……」

「……あなたが身体検査をする？ ど、どういう意味？」

「あつ、もしかして……エッチなこと言つてる？」

「うんじやないよつ！？ びっくりした！」

「もう……身体検査って何するつもりだつたの？」

「え？ 興味があるとかじゃないけど……うん、まあ……氣にはなるかな……」

「もしかして、女の子の体に詳しいとか？ 二
ういう本見てるし……」

「そこ」「そこ」…見てるんだ、やつぱり……」

「ふう、変じゃないかどうか、だけ……とか

「……」

「は？ ジゃなくて……身体検査……変じゃないかだけ……確認してもうおつかなかっとか」

「な、なんでそんなに驚いてるの。あなたから話を振ってきたんじゃない！」

「本当にすると思わなかつたって……わ、私も思わなかつたけど……」

「でも、ほら……他の男子は嫌だけど……あなたは、こう……仲いいし……」、「ういう事も……話せるっていうか……」

「ん……そ、そっちが嫌じゃなかつたら……み、見るだけね！ 見て……変じゃないか……どうか……」

「本当？ 嫌じゃない？ つていうか引かない？」、「ういうのって……」

「それなら……いいけど……」

「じゃあ……上着……脱ぐから……そ、そっち
向いてて」

「どうせみるのに？……そ、それはそうだけ
ど！ これから見ても、うんだけど！ 脱ぐ
ところを見られるのは……恥ずかしいし…
…」

「えっ？ 見たいの？ ええ、つ……す」「く恥
ずかしいんだけどな……」

「まあ、こっちからお願いしてるんだしね。わ
かつた。……見てて……いいよ」

「な、なんか緊張する……視線が熱いんですけど
ど……」

「あれだよね。誰か来たら大変だよね」

「えっと……はい……脱ぎ、ました」

「えっ？ ブラ？ いやいやいや、ブラは取ら
ないでしょ」

「えええっ、そこまで取ると思つてたの！？
いや、それさすがに……」

優衣

優衣

「それで……胸、……やっぱり大きい？ 膨らみ始めた頃から、一気にここまで大きくなつたんだけど」

優衣

「結構恥ずかしくて……私、発育も早かつたら、男の子だけじゃなくて女の子の視線も気になつて……」

優衣

「だから、今でも着替えの時間とか、他の子の視線が気になっちゃって苦手なんだよね」

優衣
「……ちなみにあなたつて、結構女の子の胸を見てたりするの？」

優衣
「いや、なんか……落ち着いてる感じがするし……慣れてるのかなつて」

優衣
「えっ？ 緊張してるって？ してるの？ 本当かなあ」

「……つて、何じつと胸見てるのよ！」

「隠さないでつて……隠すよ！ 恥ずかしいんだから！」

優衣
「ブラを取らないと、ちゃんと大きさがわからないくつて？」

「わかるでしょ！ 絶対そういう理由じゃないよね！？ 直接見たいだけでしょ！」

「そうですつて……そんな堂々と言われても……」

「……ほ、本気？ 本氣で言つてるの？」

「あ―――う…………そうなんだ」

「ん、んつ…………じゃあ…………ちょっとだけ、なら……」

「わつ…………そんな、大きい声出さないで……」

「ちょっとだけ！ ちょっとだけだよ！ どこか変じやないか…………」の際だからちゃんと見てもらいたいし……」

「本当に…………ちょっとだけ、だからね」

「…………どう、かな？」

「…………な、何か言つてよ。じつと見てないで」

「んう…………恥ずかしいんだから何か言つてよ！」「ういうの本で見てるんでしょ！」

「本物は初めてつて……まあ、そうなのかもしれないけど……」「

「それで……本当にどこか変じやない、かな？」

「自分だとよくわからなくて……男の子から見て、大きすぎて気持ち悪かつたりしないかなって」

「それはない？ 本当に？」

「それに……ぐ、ぐうとぐるって何？ ドキドキするとかそういう？」

「よくわかんないって……そんな事言われても私もわかんないし……」

「…………あの、も、もういい？ 服着てもずっと裸なのは恥ずかしいし」

「もう少しつて……じゃあ……本当にあともう少しだけだよ？」

「…………んなの見てて面白いかなあ……ねえ、なんで男子つておっぱい好きなの？」

「わからない？ わからないんだ？ へえうつ、そういうものなんだ」

優衣

「はい？ 觸りたいって言われても……いや、触るのはさすがに……」

優衣

「あ、あ……そんな落ち込まれても……」

「落ち込んでないって？ いやあ、今ものすゞ
くがつくりしてたよ？ しゅーんって感じ
で」

優衣

「ううん……やつぱり、触りたいものなの？」

「んうっ、本当に変じやないか見ても、うだけ
のつもりだつたし……そこまでは考えてな
かつた、かな」

優衣

「でも、形とか……見ても、らつたんだし……そ

のお礼つてことなら……ち、ちょっとだけ……

…

優衣

「つて、急に浮かれすぎ！ それに、ちょっと
だけだよ？ そんなに長くはダメだから
ね！」

優衣

「それでいいなら……ちょっとだけ……

…いいよ

優衣

「んつ……ん、ふつ……
ふつ、く、くすぐったい」

優衣

「あーっ、んっと……えとね……も、もう少し、ちゃんと触つてもいいよ。撫でられるみたいにされるとくすぐったいから」

優衣

「うん……痛くはないし……なんか体、熱くなつてくる」

「あはは！ エキエキするな……」んなの初めて

「アレだよ。電車の中で……触られた時も……」
ドキドキしたんだから…………

優衣
一男の子に……触られるのって……初めてたつ
たし……

「まさか放課後にこんなふうになるとは思わなかつたけどね」「

「ん、んつ……ちょっと……揉んでない？」

「……………ん、ん、たまにどうぞ、揉んでない？」
「……………わ、、揉んでるわね！ ほら、むにっ」と

「ち、ちょっとな、ひ……いいけど……」

「嫌つてわけじゃないし……は、恥ずかしいけど……し、仕方ないかなって……」

優衣

「男の子だもんね。触つてたら……そ、そ
ういうふうになるもの……で
しょ？」

「あははっ、よくわかんないね。私もわかんない。何言つてんだろ」

「はーっ…………暑い…………なんかすっぐ
暑くなつてきた」

「んっ、ふっ……く、う…………変な声、出
ちやう」

「うん？ 気持ちいいかつて言われると……
持ち良くないわけじゃないけど……」

「こ、う、ドキドキが大きくなつて……頭がボー
ッとしてくる感じ、かな」

「痛くはないよ。もうちょっと強くても……た
ぶん……大丈夫」

「あ、でもあんまり————ひやわつ！？」

「ちょっと、ダメ！ 待つて！ 乳首はダメ！」

「よ、弱いっていうか……し、刺激が強すぎて
……」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

……

「あー、うん、まあ、弱いと言えば弱いのかも
しないけど……」

「んあっ！？ ダメだったら！ 声、出ちやう
し」

「痛いわけじゃないよ？ ん、まあ……
ちょっと、気持ちいい、かも、だけど……」「…

「ダメダメダメ！ 本当にダメ！ 触られると
……ビビビッて感じがするから」

「んくくく……ちゃんと心の準備してたら……
我慢できるかもしねりないけど……」「…

「ええっ、そんな……もう少し触りたいって言
われても……」「…

「いやっ！ た、勃つてるのは、これは、違
うつ……」

「最初から！ 最初からこんな感じだったつ
て！」

「やーーっ、もう！ いちいち言わないで。触ら
れたんだから仕方ないでしょ」

優衣

「き、気持ち良かつたっていうか……痺れた感じがして……」「うちょっと、良かつたけど……」

「もっと触つてあげようかつて何！？ 自分が触りたいだけでしょ！」

「うううううううううううううううううううう
や、優しくね？ あんまり強くしないでよ？」

「んつ……………んうつ……………」

「ふ、ああつ……………うん、大丈夫、う……………痛くは、ないから……………」

「はあつ……………あ、そのぐらい、の、強めなう……………いい……………」

「あ、あつ、乳首……………か、硬く……………なっちゃう……………う、ううんつ……………は、あつ……………」

「ひ、引かない？ こういう声……………んあつ、だ、出しちゃつて……………」

「そう？ それなら……………んぐ、あつ……………いんだけど……………」

優衣

「そんな……ふ、うつ……H口い、とか、言わ
れても……」

「はあつ……はあつ……ああつ、あ、あれえ
う？「こんなに、んんつ、か、感じないんだ
けど……普段は……」

「あ……ふ、普段から、んっぐ……き、触って
るとか、じや、ないからね……」

「ああ、ドキドキして……息……苦しく、なつ
てきた」

「しゃぶりたくなつてきた！？ 何を！？」

「ええつ！？ おつぱいしゃぶるの？ 赤ちゃ
んみたいに…ううう…そ、そういう趣
味あるの？」

「普通じゃないと思つただけなあ
ええ、するのお？ ホントにい？」

「し、したいなら…ちよつとだけ、なら
……いいけど……」

「……なんか、さつきからちよつとだけちょつ
とだけつて言つてるけど、全然ちよつとだけ
じやないよね」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

あはは……もつこじさん、ひまわりな
う…………」

「なんとなく、こ、こうなるんじゃないかって
気はしたけど……」

「あ、いいよ。しゃぶる、んだよね？」
「でないでよっ。」

「じゃあ……どうぞ」

優衣「んんつ……ふ、う……あ、あつ、舐める、と……ふあつ……」

「やばい、これ……おもつ……てたより……」

「ふうう…………油断すると、くつ……」

「ふ、せひやべ」声、吐かれて……

「そんなに、吸つて……んふ、う……お、面白

二〇一七

「面白いとか…………んぐつ…………そういうのじゃな

いの？ んんつ、よく、わかんないけど…

「はあっ、体……熱くて……汗、出てきた」

優衣

「あ、ああっ、そんに、す、吸われると……
あ、ああ、ふふ、本当に赤ちゃんみたい」

優衣

「でも、んくつ……ふ、ふふ……なんなんだ
うね、これ……んんんつ、クラスメートに……
ん、ふつ、おっぱい、吸わせてあげる日
が、くるなんて……思つ……」

優衣

「ああ……ちよつ、と……乳首、を、ずつ
と、舐められる、のは……ヤバい」

優衣

「ニ、興奮……してくる、かも……」

優衣

「本当に、んくつ、この」と……んうつ……
だ、誰にも、言わないでよ?」

優衣

「んんんつ、本当に、本当だからね? う、
くつ、他の男子に、あつ、じ、自慢したり、
とか、ううつ、本当に、あ、ヤバいことに、
んん、うつ、なるんだからね?」

優衣

「はあつ……はあつ……もう、これ……身体検
査とか、あ、か、関係ない、ね」

「あ……終わり? しゃぶるの満足した?」

優衣

「んあつ! ? なに? また揉むの? あ……
あ、ああ、なんか、ヤバい」

優衣

「もうきから、ヤバい、つい、言つて、ばつか
りだけど……あ、んんうつ……揉まれると
……す」
「…………き、気持ちいい」

「こんなふうに、んつく……感じたこと……ん
んつ、ないんだけど……」

「もしかして……あなた……ん、こういうの、ん、うつ……初めてじゃない、とか？」

「……そんな」と、ないって？
「そこ、お……」
あ、ああつ……

優衣
「あ、ごめん。変な声でた、あ……ん
うつ、あ、謝る、必要ないって……それ
は、あ、そう、なんだけど……」

「はあつ…………はああつ…………変な気分になつてきちゃう」

「んあつ、こんな、おっぱい……グネグネされたの、ん、うつ、初めて……」

「でも、本当に……んんっ、飽きないの？」

「ずっと、や、されてると……ん、あつ……
ちょっと、ふ、不公平な、感じ……してき
た」

「やつやから、なんか……膨らんでな
じい。」

「ど」が「そ」、「わ」よ、「わ」…
…「わ」、「ズボン」……」「

「もしかして……お、大きくなってるの?」

「べ、別にじつと見てたわけじゃないけど、そんな
に膨らんでたら気付くでしょ…」

「……本当に……大きくなるんだ?」

「えつ、き、興味つて……そりゃあ…
ない、わけじゃないけど……」

「えええつ、そ、触るつて? それ、は…
…ええつと……」

「い、いの? 嫌じゃないの?」

「確かに……私も触りせつるわけだけど…
らせてるつていうか、しゃぶらせたりもした
んだけど……」「

「本当に……いいなり……が、触りたい、
です」

「んふふつ、なんか敬語になっちゃった

「じゃあ……ちょっと交代しよ? 私も触ってみたいし……」

「あーつ……えつと……そこの椅子に座つてもらつていい?」

「それで……私が正面に座つて……」「ついう感じでいいかな」

「うわあ……改めて」「いやつて見ると、本当に大きくなってる」「う

「なんだか苦しそう……触つてもいいのかな」

「はいっ! ? だ、出していいって……えつ! ? さ、触るって直接なの! ? ズボンの上からじゃなくて! ?」

「あ、いやつ……嫌、じゃ、ないけど……」

「……」

「う、うん、おっぱいはね……おっぱいは触らせたけど……でも、ほら……」「ちは、いわゆる性器だし……」

優衣 「ほ、本当にいいの？ 私なんかに見せちゃって……」

優衣 「あ、うん、私もおっぱいは見せたけど……」「ん…………じゃあ、本当に出すよ。あとで怒らないでよ？」

優衣 「それじゃあ…………」「この、チャックを下ろせばいいんだよね？」

優衣 「…………かな？」

優衣 「…………で、出すつてことは…………」、「の中に手を入れてもいいの？」

優衣 「入れるよ？ 本当にれるからね？ ……」
……
優衣 「…………」

優衣 「わっ、硬い…………」、「こんなになるんだ……」
…………
熱いし…………

優衣 「あ、ここからかな？ このまま引っ張つてい
いの？」

優衣 「少しづづボンもずらすよ？ 痛かつたら離つて
ね？ ……………よい、しょ」

優衣

「わっ！？ す、す、」「えええ

」
・
・

「何これ？ こんなに大きいの？ えつ？ 男の子ってみんなこんな感じなの？」

「普通……これが、普通なんだ」

「わあ……揺れてる……動くんだ……血管浮いてる……初めて、見た……」

「えつ？ 当たり前でしょ。こんなのが見る機会なかつたし」

「なんか……す、」過ぎてなんて言えばいいか……

「…………あ、『あん。じつと見ちゃつて』

「い、いいの？ もう少し見てていい？」

「そ、そ、じゃあ……もうちょっとだけ

「これが……皮、なんだ……皮を被つてるとか言つたりするみたいだけど、これが被るの？」

優衣

「あ、これ？ 先っぽ？ え……そ、触つてもいい……って言われても……」

「これも……身体検査なの？」

「まあ……そういうことでいいなら……触るけど……触らせてもいいだ……」

「じゃあ……」、「……」、……

「あ、今、声が出た？ 今みたいなのでも……」

「ニ、す、い……反応するんだね？」

「ちなみに、どのへんが……」その……気持
ち、良かつたり……するの？」

「握る？ 握るつて、ぎゅつて握つていいの？

「へん？」

「このへんを……ぎゅつ、と……」
わ、熱い。それにす、く硬い」

「えつ？ えつ？ いつも」「んな感じなの？

違うよね？ いつもはもつと小さい
んだ？」

「す、い……」んなに硬いんだ……石みたい」

「いやいやいや、そのくらい硬いよ。もつとぐにやぐにやしてゐるひへ思つてたもん」

「だつて人間の体の一部だよ？ こんなに硬いなんて思わないよ」

「でも、そつか……」「のくらじ硬くないとダメなんだね」

「それで……これを……擦つたら……氣持ちいいの？」「こんな感じとか？」

「あ、また声が出た。……へえ、本当に気持ちいいんだ？」

「こりゃ、こりゃつて……んっ手を動かしてたら……いいの？」

「んっ……んっ……んっ……んっ……」「……」

「スピード……」のくらいでいい？ 速すぎるとか、遅過ぎるとかあったら言つてね

「……つていうか、私、すごい」としゃかつてゐる

「もう少し？ 速くていいくの？ ……」「のくらじい？」

優衣 「んつ……んつ……んつ……んつ……んつ……」

優衣 「わあ……本当に気持ち良さそう……そんなに？ そんなにいいの？」

優衣 「どのへんが、いいのかな？ 場所によつて気持ち良さが違つたりするの？」

優衣 「ああ……やっぱり違うんだ。へえへつ、どのへん？ 今のと「ろが一番いいの？」

優衣 「カリつて……」「? おちんちんの——
——つて、あへつ……思わず言っちゃつた！」

優衣 「何をつて……」「? の呼び方……」

優衣 「うん、そう……ぽろつとね……」

優衣 「は、恥ずかしいに決まつてるでしょ。普段言わないし」

優衣 「嫌だよ。もう一回とか。恥ずかしいって言つてるでしょ」

優衣 「……それより、今はこっちを気持ち良くしてあげる……」

優衣

「カリのとこひつて……ちよつと戻りんじる」「こであつてる?」

優衣

「ここを……擦るつてこと……」「んな感じじ?」

優衣

「あ、いいんだ。こいつ感じでいいのね?
手を……ぎゅっと絞る感じで……? 意外と
強くしてもいいんだ?」

優衣

「こんな…………感じで…………強く
んつ…………んつ…………んつ…………」

優衣

「ちょっと……わかつてきたかも…………」

「……なんか、さつきより硬くなつてない?
握つてる感触がちょっと……違う気がするん
だけど……」

優衣

「興奮した? 擦られて興奮してるの? そ
う、なんだ……んつ…………」「いやつて
擦るだけで、興奮するんだ」

優衣

「やううつ、なんか…………ちよつと
だけ嬉しいかも」

優衣

「まあ、ほら……私の手で、気持ち良くて
きてるんだ～～って思つとね……悪い気はし
ないし……」

「あれ？ 何か出でない？ 先つぽのとこ」ふ……
…………透明なのが…………」

「これ、いつたの？　これが精液？」

あ……違うんだ……はい？ ガマン？

「お、アーティスト？」

前編 嘘でしょ!?

シナリオ脚本

ガマン汁でしょ？ そんな名前……馬鹿過ぎるって……誰が付けたのよ！」

え……ええ……本当に？ 本当にそ

〔四〕

いた」とないかど……」「

「ええ……本当にそんな呼び方なの？」なんか
…………衝撃的過ぎる

「それで……気持ち良くなつてきたら……」「う
いうのが出るんだ?」

「気持ちいい? 本当に気持ちいいの?」

「気持ちいい……けど? けど、何? 言つて
くれていいよ。ここまでしてるんだし」「

「ガマン汁を……手につけるの? 私の?
……手につけて……擦る」

「あつ……あ——つ、そつか。滑りが良くな
るんだ」

「あ——つ、はいはい、そういうことね。少し濡
らしたほうが滑りが良くなつて、それで気持
ち良くなるんだ」

「ん——つ、いいよ。あとで手を洗えばいいんだ

し……そんなに嫌な感じもしないし……」

「うん、しない。……なんでだろね。
あなた、だからかな?」

「ほら、クラスでは仲いいほうだし……
ぶん、仲良くない男子だったらダメだと思
う」

「あ、それだと仲良かつたら」「ういう事するみたいになっちゃうか」

「ん、んんん、あなただけって言つとお、
うつ、意味深だけど……でも……
ちょっとそうかも……」「

「じゃあ……ガマン汁、だっけ……
……擦つてみるね」

「んっ……んっ……んっ……んっ……
んっ……んっ……」

「ビツ、もつきよりも気持ちいい。」

「……そつか。それならいいんだけど……
……いたたつ」「

「あ、ちょっとね……」の体勢、膝が痛くなつ
ちやつて

「えつと……隣に行つてもいい?」

「そう、もう一つ椅子を置いていい?
じゃあ、そうする」

「よいしょ…………こっち側から……するね

優衣

「もう一度、握ってガマン汁を塗っていいんだよね？ おちんちんに」

優衣

「……ん、言つたけど……だって、ちゃんと言わないとわかりにくいし」

優衣

「ええっ！？ なんでそんなの聞きたいの。あまり気にしないでよ」

優衣

「ええ……本当に聞きたいの？ ゼ、絶対に嫌じやないけど……恥ずかしいし……」

優衣

「もう一つ、い、1回だけね。それでいい？」

優衣

「おちんちん」

優衣

「……だ、黙らないでよ！ 余計に恥ずかしいし……」

優衣

「もう一つするよ。擦るからね！」

優衣

「んつ……んつ……んつ……んつ……んつ……んつ……」

優衣

「……もうちょっと近くのほうがいいかな」

「んしょっ、と…………あはつ、近いね」

「でも、このくらい近づかないともう、びらいし
……ん、でも、グキドキする」

「だって、男の子とこんな距離で座ってるの初
めてだし」

「なんか、これ…………なんだろね…………何してるん
だろうね、今更だけど…………」

「朝、電車で胸を触られたときは、すごい事に
なっちゃったって思ったけど、まさか放課後
にこうなるとは…………」

「あ、「めん。ちゃんと手も動かすね」

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、
んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ……
……」

「こんなに速くて大丈夫?」

「気持ち…………いいんだ? っていうか、すごい
顔してる」

「なんか、こう…………うつとりした感じ……
そんな顔初めて見た」

優衣

優衣 「もつと上？ 先っぽのほうまで擦つてい
いの？」

優衣 「こんな感じ……かな？ んっ、んっ、んっ、
んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ
…」

優衣 「ねえ……自分でするときも……」「んな感
じなの？」

優衣 「あっ、あははっ、照れた。今、照れたで
しょ」

優衣 「えへへ、どうなの？ 一人で……」「んなふ
うに……する」とはあるの？」

優衣 「…………するんだあ！？ へへへ、やつぱ
りあなたもするんだあ」

優衣 「うん、それは知ってる。男の子はだいたいみ
んなやつてるんだよね？」

優衣 「それはわかってるんだけど……やつぱり、ど
うのかなって思つて……」

優衣 「その…………どうなの？ 自分であるのと…
…比べて……」

優衣

「私のほうがいいの？ ホントにいい？ お世辞みたいこと言つてない？」

「ふうん…………確かに本当に気持ち良さそうだしね…………」

「先っぽ？ この赤いところが…………一番気持ちいいの？」

「ん、ふふっ……ガマン汁でぬるぬるする……こんなに速くしゃべっても大丈夫なものなんだ」

「あと、音…………いやあ、ほら…………ちゅくちゅつていいってるから、それが…………エッチだなって思つて」

「…………一人でするとさも、一いつ感じにするの？」

「照れなくていいでしょ！ もうオナ、二……より……すい」「い事しゃべってるんだから」

「言つてない。そんなエッチなこと言つてません。…………ぶぶつ」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

「もーっ、いちいち言わないでよ。自分でもしまったって思ったんだから」

も一つ、いちいち言わないでよ。自分でもしまったって思ったんだから」「

「そりゃ…………言葉ぐらい、知ってるよ…………」
「…………」

「えっ？ 私？ し、しないよ！ 女だし……」

「本当に本当……した」とないよ」

「…………で、私のことはいいから――
うちよつと」うちに集中するね

「んつ、んつ…………んんつ…………先っぽの、穴が……ヒクヒクしてゐる」

「ここからおしゃべり出るんだよ
ね？」

「不思議だね。おしつこだけじゃなくて……精液、も、出るんでしょ？」

「不思議だね。おしつこ」だけじゃなくて……精液、も、出るんでしょ?」

「……出てるんだよね？」
「うやつて、擦つたら……気持ち良くなつて……」

「「う、かな？ 上に……搾り上げるよつこ……きゅつて……先っぽを……搾る感じで……きゅつて……」

優衣

「あつ、ビクツでした。…………今のは？　今の感じでいいの？」

「きゅうひ……きゅうひ……氣持ちはいい？」

「そう、なんだ……声も出てるし……本当に、気持ちいいんだね」

「でも、あんまり大きな声出したら、誰かに聞かれるかもしれないよ」

「えつ、えつの？　声が……我慢できないくら……？」　そんなに……なんだ？」

「あ、えつ？　げ、限界って何？…………イクの？　えつ？　射精？　射精するの？　ここで？」

「えつ、えつの？　このまましていいの？　射精って……と、飛ぶんじゃなかつたつけ？」

「あ、うん……じゃあ……つ、続けるから……イキそうになつたら教えてね。手で受け止めてあげるから」

優衣

「す」い……んつ、んつ、んつ、んつ
足がガクガクしてゐ……イキそうなんだ
ね？ んつ、んつ、んつ、んつ
」

優衣

優衣

「『んなに……う、嘘でしょ……え、ええつ……い、1回じゃないの？ あわつ、また出でる……えええ……『んなに出来るものなんだ』

優衣

まだ動かしてたほうがいい？

優衣

「終わりで、いい？」

優衣

優衣

「くつ……ふふふふつ……全然受け止められなくて下にこぼれちゃった。……ちゃんと拭いてないとな?」

優衣

「あ、ハアハアしちゃつて……そんなに疲れたんだ?」

優衣

「……ねえ、そんなに……気持ち良かったの? ふうん、そうなんだ」

優衣

「あつ、ちょっと見たい。……何をつて……おちんちん射精した後のおちんちん見せて」

優衣

「いい? ジやあ、ちょっと観察……」

優衣

「は―――すつ」「いビクビクして

優衣

「本当にここから出るんだね。びっくりしちゃった」

優衣

「……おちんちん、ベトベト……」「れ、どうするの? 何か拭くものってある?」

優衣

「ん、だよね。ないよね。でも、何かで拭かないと気持ち悪いでしょ? ハンカチとか持つてる?」

「…………ん？ 今、何か言つた？ 言つたよね？」

「ボソッと」

「何？ 何かしてほしいことがあるんでしょ。……ここまでしゃったし、何があるなら
言つていよいよ」

「…………え、口でお掃除をしてほしい？」

「それ、って…………へつ？ もしかして、お
ちんちん？…………えつ？ おちんちんを
舐めるの？」

「ええ…………おちんちん、を…………えつ、この
ぬるぬるを、舐めてキレイにするって」「

と？」

「なんか…………聞いたことはあったけど…………本當
にそういうのするんだ」

「う、う…………口でかあ…………それは考えて
なかつたけど…………精液って、口の中に入
れても大丈夫なものなの？」

「…………ん、わかった。いいよ。する。…………

「うん、本当に」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

「別に無理しているとかじゃなくて……私も興味はあるから……ダメだったら『めんね。すぐによめちゃうかも』

優衣

「うん、大丈夫。ちょっとだけ……やってみた いような気もしてるし……」

優衣

「じゃあ……やつてみる、ね」

優衣 優衣
「ん、あ…………れろつ…………うつわ、につ
が…………！」

優衣
「あ、いや…………苦いっていうのも違うかな?
なんか…………なんて言つたらいいんだろ」

優衣
「れろつ…………れろつ…………ん、んんつ……
…………やつぱり、苦い、でいいのかも…………」
「精液って…………」
「ういう味がするんだ……れ
ろつ…………れろれろつ…………」

優衣

「苦いけど…………れろつ、ずっとやつてたら、
ちゅつ、ぴちゃつ…………慣れて、くるのか
な?」

優衣

「あつ、こっちにもついてる…………れろつ、れ
ろつ、ん、れろれろれろつ…………ん、れろおお
うづつ」

優衣

「んっ、ビクッとした……もしかして、「つい
うのも、れろれろっ、気持ち良かつたりする
の?」

優衣 「れろっ、れろっ……そなだ……れろっ、
やつぱり、ちゅっ、先っぽのところが、れ
ろおうっ、良かつたりするの?」

優衣 「このへん? れろっ、れろれろっ、カリ、
だっけ? ここが……いい?」

優衣 「ん、んんっ、ちゅっ、ふ……れろっ、れろれ
ろっ、ん、ちゅっ、ちゅっ、れろれろれろっ
……」

優衣 「これで、だいぶ綺麗になつたとは思うけど……
れろおつ……なんか、また感じてきてな
い?」

優衣 「えつ? 何? ……もつとしてほしい
の?」

優衣 「今度は……咥える……おちんちんを、口
の中に入れるつてこと?」

優衣 「ん……」今までやつたんだし、いい
よ……上手くできるかわからないけど、やつ
てみる、ね」

優衣

「あ…………むうつ…………ん、んんつ……
…お、おつき、い…………」「

「座える、と…………んぐ、う…………す」「
む、うづつ…………は、入り、きらない」

「これで、ん、んぐ、う…………どうしたら、いい
の?」「

「ん、んんつ…………頭を…………む、ぐうつ…………動か
す? ん、ぐぐつ…………「んな、感じ?」「

「んぐつ…………んぐつ…………んぐつ…………んぐつ…………
…んぐつ…………んぐつ…………んぐつ…………んぐつ…………
…」

「ん、」ほつ…………「ほつ…………う、大丈夫……
…ん、むつ、喉に、当たつただけ」

「結構、ん、ぐつ…………難しい、ね…………んん、
ちゅつ…………れろつ…………ちゃんと…………できてる
のかな?」「

「ぢゅぷつ、ん、むうつ…………んぐつ、んぐつ、
んぐつ、う、ううつ…………「うやつて、ん
ぐつ、頭を動かして…………すれば…………んぐつ、
んぐつ、んぐぐぐつ…………いいんだよね?」「

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

「吸い上げたり、するの？ ず、ずずつ、
ぢゅつ……」ついで感じ、ぢゅぶつ、か
な？」

「自分にない部分だから、んぐつ、む、ぢゅ
ぶつ、よくわかんないんだよね、んぐうつ…
」

「とりあえず……んぐつ、」つづく感じで、続
けるね

「んぐつ、んぐつ、う、む、ぐううつ、ず、ず
ずつ、ぢゅつ、ぢゅつぶ……むぐうつ、ん、
んんつ、ずぶ、う、ぢゅるつ……ぢゅぶ
ぶつ、む、むぐう、んつ……んつ、ん、んん
んつ!」

「んふ、あ、熱い……むぐう、んぐう、う、
ぶつ……んぐんぐんぐう、ひひう、ふう……
…んぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐう……す、
すがせるのねのねのねう……」

「む、ぐつ……なんか……ぬるぬるしたのが、
増えてない?」

優衣

「んん、う、これ、もしかして、れろつ……ガ
マン汁？ また出てるの？」

「んふつ、ふふふつ……キレイにするために、
してるのに、れろつ、また出したたら、意味な
いじゃない」

「そのぐらいい……れろつ、気持ちいいってこ
と？ んふふつ、なんか、そういうふうに言
われると、れろつ、嬉しいよね」

「じゃあ…………もっと、激しくしちゃおつか
な」

「ん、れろおつ、れろれろつ、ず、ぢゅ
ぶうつ、ん、んんつ、ずぷつ、ぢゅ、む
うううううつ、んぐつ……」「んながうにして
も、痛くない？」

「そつか。良かつた……れろつ、れろつ、
ぢゅ、ぷつ、ぢゅぷぷつ、む、ぐうつ、ん、
んんつ……れろつ、れろれろれろおお～
うつ、ん、むつ、れぶつ……んぐうつ、ん
ぐつ、んぐんぐんぐつ……」「……」

「んふふつ、ビクビクしてる……そんなんに気持
ちいいんだ？」

優衣

優衣

「だんだんわかつってきたんだけど……先つぱみ……」の赤いと「ひすい」へ敏感だよね?」

優衣

「舌で……んんつ、くちゅくちゅくちゅつ……つて、ずっと舐めてたら、足がすご~く震えてるもん」

優衣

「もしかしてイキそうなの? サッキイったのに? またすぐに出るものなの?」

優衣

「そっか……それじゃあ……もつと、してあげるね」

優衣

「れろつ、れろおつ、ん、んぶ、う、むぐつ……ん、ん、んんつ……ず、ぢゅううつ……ぢゅぶつ、んんつ、ふふつ、暴れてる……むぐ、う、んぐつ、んぐんぐんぐつ、ぢゅ、ぱつ……」

優衣

「頭も……んぐつ、んぐつ、もつと速くても、いいのかな? んぐつ、んぐんぐんぐ、ううつ、んぐんぐんぐんぐんぐんぐうううつ……ぢゅつ、ぢゅうつ、ぢゅうつ、ぢゅうつ、ぱつ……」

優衣

「ん、ふうつ……あんまり激しくすると……酸欠を起こしちゃう」

優衣

「うん、無理はしないようにする……んぐつ、
んぐつ、んぐうつ、ず、ぢゅつ、ん、れ
ろつ、れろれろつ、んはあつ……あむうつ、
ん、んんつ、ず、ぷつ……ずずずつ……」

優衣

「ん、んんつ……もづ、震えて……んぐつ、ぬ
るぬる、が……す」「い、いっぽい……す、
ちゅつ……！ んんんつ、」「こ、れろつ、
先っぽ、んむうつ……いっぽい、して、あげ
る」「

優衣

「むぐ、んうつ、べ……んぐつ、ず、ぷつ……
いつて、いいよ、ん、んうつ、ず、ぢゅ
ううつ……」「……

優衣

「このまま、んぐつ、んぐつ、出して、
ぢゅつ、いいから……うん、わかってる
……んぐ、う、このまま、ぢゅるるつ、出し
たら、ん、んうつ、口の中、に……ぢゅつ、
精液、出ちやうよね」

優衣

「でも、口の中、で……ぢゅううつ、イって、
いいよ、ぢゅるるつ、出して、いいから、
ん、んぐう、む、ずぶつ、う、ん、ぢゅ
ううつ、ずぶつ、射精して、んんんつ、い
から……」「……

優衣

「エギー、エギー、ハ、むぐ、す、ザキ、ザキ、
ふり、ル、ムグ、ハ、エギー、す、ザキ
ザキ、ザキ、ハリ、ルル、ハリ、ザキムグ、ハ、
エギー、エギー、ハ、ムグ、ハ、ル、
エギー、エギー、ハ、ムグ、ハ、ル、

תְּנַשֵּׁא בְּרִית־מָה־בְּרִית־
תְּנַשֵּׁא בְּרִית־מָה־בְּרִית־

優衣

優衣

「ん、はあつ…………！ の、飲んじやつたあ！ こほつ、こほつ…………う、だ、大丈夫…………大丈夫だけど、ちょっと待つて」

優衣

「……ほつ、……ほつ……ん、……うつ……出されていいって言ったけど……」「ほつ……出された後、どうするか考えてなかつた」

優衣

「ん、うん……なんか、ううってなる味……吐きそつとかそこまで酷くないんだけどね」

優衣

「大丈夫大丈夫。私が出していいって言つたんだから。気にしなくていいよ」

優衣

「それに……ふふつ、2回もイカせちゃつた。…………」「れつてすゞくない?」

優衣

「どう? すつきりした? 自分にするより気持ち良かつた?」

優衣

「…………つて、なんかちょっと不満そういうにしてない? それともどこか痛かつたりした?」

優衣

「……はい? 自分だけ恥ずかしい思いをしたから? 私の…………アソコ、を見たいって?」

優衣

「えええええええ、そ、それはちょっととすがに恥ずかし過ぎるって言つかる」

優衣

「身体検査？　ああ……そういういえば最初はやういう感じで始まつたんだつたつけ。もう忘れてた」

優衣

「私の…………身体検査…………したい、の？」

「う、んんんんんんっ…………ん、わかつた。私も見るだけじゃなくていっぱいさせてもらつたし…………もつ…………お互いに全部見せちゃおつか」

優衣

「あ、でも、ホンシットーに誰にも言わないでね！？　絶対よ？　冗談で言つてるんじやないからね？」

優衣

「2人だけの秘密…………うん、それを守つてくれるなら…………いいよ」

トラック4●2人だけで秘密の身体検査

「えと…………じゃあ、ど、どうしようか？
……机？　そここの机に座ればいいの？」

「い、いづれ…………こんな感じ？　それで……足を……上げる？　あ、体育座りみたいに？」

優衣

「それで……足を開く、と…………M字開脚？…………そういう名前があるの？」

優衣

「ん…………わかった。わかりました。つまり
こうじゅうポーズで……いいのね?」

「…………うあああ…………ものす」「く恥ず
かしい」

「パンツ…………見えてるよね?」
にこんな堂々と見られたの初めて「…………男の子

「はあ…………恥ずかしすぎて、なんか熱くなつて
きちゃつた」

「えつ? パンツを脱がさせてくれって?
…………ええつ…………し、したい、なの? そういう
う、「…………」

「ん…………じゃあ…………いい、よ…………脱がせて
も…………」

「あああ…………恥ずかしくて死にそう…………
…………うん、やつきのポーズ、だよね?」

「じゃあ…………ど、どうぞ…………」

「…………現実じゃないみたい。…………だつ
て、クラスメートの男の子に…………見られ
ちゃってるんだもん」

優衣

「見えてる? ちやつてるよね」
「うだよね。見え

優衣

「.....つて、ち、ちよつ.....顔つ、近いつ：
近付けすぎだつてば

優衣

「初めてだからちゃんと見たいって言われても
.....そこ.....に、匂いとか.....するかもしれ
ないし.....」

優衣

「それに.....なんか.....緊張する.....」

優衣

「えつ? 撃りたいの? ん.....まあ、い
いけど.....優しく、してね?」

優衣

「うん.....わづくりと.....優しくしてほしい.....
」

優衣

「あつ.....ああ.....あ、そこは.....
う、うん、そこは.....いい、といふ.....
クリトリス、う.....」

優衣

「い、痛くはない.....あ、はあつ.....そのぐら
いで.....そういう.....転がすみたいな、感じ
でされると.....ああ.....気持ちいい.....」

優衣

「ん、もひり、濡れてるとか言わないで。仕方ないでしょ。こんなことするの初めてなんだから……」、興奮する「……」

優衣 「あ、そこは……あ、あんまり深くは……指、入れないでね」

優衣 「うん……初めてだから……深く入れられると……や、破れちゃう」

優衣 「やだ、音……聞こえた……私、濡れてる……んんっ……」

優衣 「あーーー、濡れた指で、ふ、あーーークリトリス、う、む、触られると……あ……」

優衣 「ああ、これは、ヤバい、の……んんっ、それされると……感じ、過ぎて……」

優衣 「あ、あ、あーーーそ、そ、う、あ、その、膨れてるところ……あーーークリトリス、あ、んっ、皮から、あ、で、出で、きちゃってる……」

優衣 「ああああー、ち、ちょっと、それは……直接、さ、触られると……あ、あーーー、ヤバいつて……」

優衣 「ずっと……が、されてたらあ、あ、イク、か
も……」

優衣 「あ、んっ、んっ、んんっ、なんで？ ん
んっ、こんなに、ひ、んっ、気持ち、いいの
……初めて……いつも、よりも……」「！」

優衣 「えつ？ 一人でしたこと、ないって、言つて
た？ あ、ああっ、そう、なんだけど……
んあつ、う、嘘よ、んあつ、したこ
と、あ、あ……ふあつ、それ、き、気持ち良
すぎ……！」

優衣 「すゞ、あ……オナニー、より、んく、あつ：
…今のはうが、あ、ふあああつ、気持ち、い
い……！」

優衣 「ぐ、あっ！ あ、ちょっと……待つて！ 本
当に、イ、イきそ……は、早い……！」

優衣 「手、待つて、ああつ、と、止め、あ、イク
ッ、あ、ああああつ、嘘つ、こんな……すぐ
に……ん、あつ、あ、あああああああ……
うつ……！」

優衣 「イクウウウウウウウウウウウウウウ
ツツ！！」「

「う、うううつ…………うあつ、く…………手、も

うダメ！ 手、止めて！」

「ふううつ、うつ…………ふうつ…………ふうつ

[REDACTED]

「嘘、でしょお……」なんにすぐには

イニシアード

「……うん、本当にイッた。自分でもびっくり

するくらい早かった」「

「あなた、なんでそんなに上手いの？」本当に

「初めてなの？」
「……なんか信じられない

「…………うて…………ええつ、なんでもまたおつきあいして
てるの？…………何が、じゃなくて…………ほ
ら、それ…………おちんちん、また大きくな
なつてるじゃない」

「私を……いかせたから？」それで興奮して？

「私を……いかせたから？ それで興奮して？ 触つてもないのに、そんなに大きくなるものなの？」

「また……いたくなつてる？ そんな感じの

「また……イキたくなつてゐる？ そんな感じの顔してゐるけど……あつ（気付き）」

「…………ふふ、今、何考えてるか当ててみようか？」

「ちょっとと、考えてるでしょ。…………」のまま最後までしゃった、「…………」

「隠さなくていいよ。私もちょっとと考えちゃつたし。…………ここまでしてるんだもん。考える方が普通だよね」「…………」

「…………」「ううのは、ちゃんと彼氏ができる時って思ってたけど…………」「ううのもアリなのかなあ」「…………」

「私も…………私もね、嫌なわけじゃないかな…………上手くできるかは、わからないけど…………」

「…………」

「うん、本当に…………大丈夫。意味はわかってるよ。そこまで子供じゃないし」「…………」

「でも、ほら…………ここまでこうなっちゃって…………もう止まれないって感じで…………」

「だから…………エッチ…………してみよっか？」

「うん、それじゃあ…………そっちの机をここに付けてベットの代わりにしようか」

「ありがとう。それじゃあ…………ちょうど持つて帰る体操着もあつたし、これを下に引いて……」「うわって寝てつと……」

「はあ…………それにしても私、今…………い格好してるよね」

「わかってる…………全部見えちゃってるもんね…………あふふ、恥ずかしうつ」

「あ…………あんまり声出したらヤバいよね。こ二、学校なんだし」

「…………ふふ、なんかここが学校だつてこと忘れそうになつてくる。忘れちゃダメなんだけどね」

「なんか…………不思議な気分…………初めてのセックスが、こんな形になるなんて……」

「うん…………するなら…………しちゃおつか…………誰も来ないうちに……」

「いいよ…………きて……」

優衣 優衣 優衣 優衣 優衣 優衣 優衣 優衣 優衣

「ふはっ！ 頭、近つ……！ なんか……笑わずにいられないっていうか……」「あ、そのまま……ゅっくり！ ゆっくりね？」

「あ、そのまま……ゅっくり！ ゆっくりね？ ゆっくり……近付いてみて」

「あ…………当たつた」

「ん、その……シンシンしてるのが……お

ちんちん？」

「えっとね！ ちょっと待つてね！ ちょっとと違うから……も、もうちよつと上……」

「……」

「うん、そ、そっちは、違う穴だから……」

「そう、そのへん……」

「そこ、かな？ ゆ、ゆっくりね？ ゆっくり

……押してみて」

「ん、うつ……そう、あつてる……あ、あつ……なんか……ぐぐって、きた」

「うつ…………ちょっと、わかる、う…………ゅっくりね……ん、んんんっ…………じ……んんっ……これ、入ってるの？」

「くっ、ううつ……お、押し上げ、られてる感

「んっく……こっちの感覚だと、ふ、う……よ
くわからなくて……」

「でも……んうつ、お腹の底が……うつ、少
し、だけ……押されてる感じ……する」「

「うう、いづッ！？ う、く……ち、
ちょっとだけね、痛かった……」「

「ああ、でも……仕方ないよね。そういうもの
だし……大丈夫……もう少し、強く、し
てもいいよ」

「ふふっ、そりや痛いと思つけど、初めてなん
だから仕方ないし……」

「うん……」のまま、きていいよ

「…………んんんっ、く……う、
うううう、ぐ……」「

「ふ、ふうつ……だ、大丈夫……
ままで……うぐ、う、ううつ……」

「これ、入ってる？……半分、くらい？ う
うつ、もう半分、あるの？ んんぐつ……
！」

「う、ぐ、ぐぐつ……そ、そのまま、いいから
……ぐ、うつ……き、きてつ……！」

「いツツ、ぐいいいいいいい——
ツツ

「！」

「ぐ、ううつ……く、ふつ……ふうつ
……ふうつ……ふううつ……」

「今のって……ぜ、全部、入った?
入ったんだ。はあ……良かった」

「……うん、いきなりズキーンって痛みが走っ
たけど、動かなければ今は大丈夫」

「ああ……これで処女喪失。ロストバージ
ンしちゃったね！」

「ん、ふふつ、別に後悔してるわけじゃない
よ。それに……あなたなら……いいかなって
思つたから」

「……うん、本当に……なんか……告白し
ちゃつたみたいになってるけど……」

「ん、好き? んんうつ、そりや好きか嫌いか
で言えば……好き、だけど……」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

「……つていうか、今話すことじゃないよね。
こんな入れたまんまで」

「少しは落ち着いてきたから……動いていい
よ」

「うん、ゆっくりしてくれると嬉しい……け
ど、あなたが気持ち良くなるようにやってみ
て」

「…………ん、うつ…………んん、ふ、う……
…………んんつ…………んんんつ…………」

「だ、大丈夫…………」の、くらいのス
ピードなら…………」

「ふうつ…………く、ふつ…………ん、んつ…………くうつ
…………ふうつ…………がううつ…………」

「熱い…………す、ぐ…………あ、あつ、こんなに……
んんつ、熱くなるんだ」

「ふう、くつ…………あなた、は…………う？、んん
んつ、どんな…………感じ…………？」

「気持ち…………く、ふつ、いいの？、んつ……
ん、うつ…………そう、なんだ、あ…………良かつ
た」

優衣

「くふ、うつ、し、心配、するよ……くうつ、
ど、どうなのかなつて、んんつ、思つ」
「…」

優衣

「だから、あ、んん、気持ち、良く、ううつ、
なつて、る、なら……あ、あつ、安心、する
…」

優衣

「ん、んうつ……んんつ、はあつ、はあつ……
もう少し……速くしても、んくつ……
だ、大丈夫かも……」

優衣

「ふうつ……痛い、んだけど……ちよつとず
つ、う、慣れて、きてる、ような……きてな
い、よつな……」

優衣

「でも、ん、んうつ……いいよ……く、うつ、
速く、して、みないと……わかんない…
…」

優衣

「痛くて、んくつ、ど、どうしても、が、我
慢、できなかつたら、あ、また、お、遅くし
て、く、う、くれたら……いいから……」

優衣

「んつ、んつ、んうつ、んんつ、ううつ、
う、ぐ、ううつ、ぶうつ、ぶうつ、
ううつ……」

「うぐひ、も、もう少し、だけ……ゅうぐり」

「うん。もう少し遅い感じなら……大丈夫……」

…」

「んぐ、う……ん、んつ……んんん、うつ……
う、う、うつ……んぐ、うつ……」

「くふうつ、んん、う……ふ、うつ、くうつ……
んつ、んつ、んあつ、うつ、くうつ……
ぶうううつ……」

「す……い、ね、うあつ……私達、ふうつ……ふ
ううつ……今……んんつ……セックス……し
てるんだね」

「こんなふうに、なる、なんて……んあつ……
朝まで、あ……思つて……なかつた……けど
…」

「くふうつ、くふうつ……なんか、嬉しい……か
も……んんうつ……」

「ふうつ、ふうつ……んんつ……あ、いいよ、
…スペー……ド、早くしても……」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

「アソコ……熱くて……んつ、痛いのが、に、
鈍ってきたみたいな……んうつ……感じがす
るから……」

「それより、イ、イケ、そう?」のままして
たら……んうつ、イケそう、なの?」

「あ、でも待って……んんつ、勢いで、し、し
ちゃったけど……んく、うつ……中は、あ、
さすがに……んんつ、う……」

「く、ふつ、あくうつ、でも……ど、どうしよ
うかな……ん、んうつ……これ、言うのは…
・・・ちょっと恥ずかしいけど……たぶん、だ、
大丈夫」

「うん、大丈夫……な、日、だから……んうつ
・・・んん、くつ……んつ、んつ、んつ……
・・・！」

「だから……あ、あつ……もう、中で……いい
よ」

「んぐつ、うつ、ち、ちょっと! なに、い、
勢いが、強く……んく、う、ううつ……!」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

「んぐつ、うつ、ち、ちょっと! なに、い、
勢いが、強く……んく、う、ううつ……!」

優衣

「もしかして、くが、ふつ、興奮、した、の？
んうつ、んうつ……ん、ん、んつ……」

「…」

優衣

「そんな顔……しちゃつて……んんつ、く……なんか、うれ、しい」

優衣 優衣
優衣 「んは、あつ、いいよ……んぐつ、そのまま……う、動いて……ん、あつ、大丈夫になつてきたから……」

優衣 「はあつ、はあつ、あ……ん、は、あつ、ふあつ……ああつ、熱い、ああつ、「んなに……んは、あつ……ああつ……」

「いいよ、出して……ん、あつ、中で、イつていい、よ……あつ、ああつ、あああつ、あああつ……」

優衣

「あぶつ、あ、あああつ、ん、はあつ、はあつ、はあつ、息、くるしつ、ひ、あつ、あああつ、頭、あ、と、飛ぶつ、う、飛ん、じやいそ、お、ああつ、はあ、あああつ……」

「…」

優衣

「あああつ、音が、あ、すゞい、あ、ああつ、ん、はつ、それに、あ、んうつ、お腹に、ひ、響く、う、はつ……す」、ひつ、揺れて、う、あああつ、お腹の、奥まで、んあつ、と、届いてる、みたい」

優衣

「んはつ、ああつ、ふ、はつ、んはあつ、く、はつ、うあつ、うああつ、ん、ああつ、体が、揺れて、ん、はあつ、あ、あ、あつ、熱い、けど、ああつ、なんか、ち、ちよつと、いい、かも……！」

優衣

「気持ち、い、いい、かも、ん、はあつ、変な、感じが、あ、ふあつ、う、ああつ、こんな、の、はじめ、て、ん、はあ、あ、ふああつ……！」

優衣

「イ、イキ、そう？　すごい、んはつ、速い、よ、んあ、ああつ、いい、よ、イつて、んあつ、イける、なら、あ、あつ、いいよ、中つ……んはあつ、中に、出して、ああつ、いいから、あ、んあつ、あああつ……！」

優衣

「あ、うあつ、あ、ああつ、ふ、はあつ……
あ、あ、あつ、ああああつ、んあつ……あ
あつ、ああつ、ああああつ、あ、あ、う
あつ、う、はあつ、ああつ、く、はあつ、あ
ああつ、ああああああツ！！」

「あツ……？」

優衣 「あ、あ……何か……きて……お腹が

あつたかい」

優衣 「あなたは……どうだった？……
んだから、良かつたってことだよね？」

//ヒロイン立ち位置：9

優衣 「うわ……それにしても……血が垂れて体操

着についちゃった。これ、落ちるかなあ？」

優衣 「それに、……今更になつてお腹のズキズキが
戻ってきて……私の……おまんこ……にも違
和感があるし」

優衣 「うう、これ、ちゃんと歩いて帰れるか
なあ？」

トラック5●帰り道

優衣 「んわつ……！」、「めん。またもたれか
かっちゃつて」

「はあ……意外と下り坂が辛いんだよね」「ホントに」「めん。なんか……足の踏ん張りがきかなくなつて」

「あはは……気にしなくていいって? ……自分のせいだから? ……あつ、照れた照れた」

「でも、まだ痛むし……お言葉に甘えて……肩、貸してもらうね」

「はあ……やつと落ち着いてきた感じがするけど……教室の掃除、ちゃんとできてたよね?」

「なんか今になつて不安になつてしまつたけど」

「まあ、人に言わなかつたら大丈夫だよね。……本当に絶対に誰にも言つちゃダメだよ?」

「うん、そこは信用してるから。約束ね?」

「でも……本当にびっくりだよね。「ついう事になるなんて……」

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣

優衣 「えつ? 私達の……」「これから……? こ、これからって言われても……」

優衣 「今まで通り、は……ちょっと無理かな? あはは、絶対意識しちゃうよね」

優衣 「あなたの事は……クラスで一番仲が良かつたし……いいなって、思つてたりもしたんだけど……」

優衣 「うん……そつ……実はそつなのです」

優衣 「ん、もうつ、「ういう話するほうが恥ずかしいし……はい、「の話おしまい! また明日つ!」

優衣 「……そつ、明日……明日、またゆつくり話そ」

優衣 「えつ? 誰かいると話しにくいし……ほ、放課後でいいんじゃない?」

優衣 「うん、放課後……つて、その顔、何考えてるの? 話するだけだよ? き、今日みたいない……のは……さすがに危ないんだから」

優衣

「どうしても……したいんだつたら
度は、ちゃんと準備してからね」

今